

# しまねの道徳 小学校中学年

道徳教育郷土資料

島根県教育委員会



# しまねの道徳

## もくじ

道徳の時間は.....  
大きな心を育てよつ.....  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13

- 1 新しい田んぼを作つ  
ひづり  
田んぼをつめ立てたト藏孫二郎  
ほくらのむねをひらくらのぶおと
- 2 泳げ、空高く  
いよいよ  
意宇川のこじのぼり
- 3 一万まいの花びら  
しまね  
島根がほゝる和菓子職人  
わがしょくにん
- 4 お手本はいらない  
あおきじつさぶろう  
青木実三郎先生の絵の指導  
しじゅう
- 5 たつた一人のお医者さん  
えんどうだい
- 6 石見神楽面作りの喜び  
いわみかぐらめん  
石見神楽面作りの喜び  
かくろ
- 7 よみがえれ、お茶畑  
お茶農家  
吉田茂さんの決意  
のうか  
よしだいせき  
ちやばたけ
- 8 三かぶのいぐさ  
たたみ表の父  
國東治兵衛  
あひだい  
くにとうじへえ
- 9 名賀にひびけ、汽笛  
いはせ  
S-1が走る町  
津和野町  
つわのまち
- 10 日本のファラデー  
科學者になつた永海佐一郎さん  
かがくしゃ  
ながみさいちろうさん
- 11 蒸気船がつなぐ未来  
じょうきせん  
まつづなぐみらい
- 12 少しだけなら  
まつしだけなら
- 13 レストランで.....  
73  
69  
63  
57  
51  
45  
39

33

27

21

15

9

3

2

1

# 道徳の時間は……

■お話を読んで、いろいろなことを感じよう。

自分らしさを見つけよう



たくさんの人とかかわり  
合ってすごそう



■みんなで話し合って、いろいろな考え方を知ろう。



自分自身をよく知り、  
みんなに伝えよう。

○○さんの考えは  
参考になるな。

○○さんはこんな  
考えをもっていたんだ。



友だちの考えに耳をかたむけよう。



それぞれの考えについて、  
話し合おう。

そうは言っても  
むずかしいときも  
あるな。



■自分をみつめ、よりよい生き方を考えよう。

●なやんでいること、こまっていることのわけ(理由)  
を見つけよう。

●これからのことについて、真けんに考えよう。



なやんでいる  
のは、自分だ  
けではない。

# 大きな心を育てよう

すてきな  
自分になる

自分で考える

12 少しだけなら

今よりよい自分に

- 1 新しい田んぼを作ろう
- 3 一万まいの花びら
- 7 よみがえれ、お茶畠ちやばたけ
- 10 日本のファラデー



## みんなと仲よくすごす

な か  
きまりやマナーを守る

まも  
13 レストランで

やく  
みんなの役に立つ

ひとり いしゃさん  
5 たった一人のお医者さん

8 三かぶのいぐさ

ふるさとを大切に

およ  
2 泳げ、空高く

4 お手本はいらない

いわみかぐらめん  
6 石見神楽面作りの喜び

なよし  
9 名賀にひびけ、汽笛

じょうきせん  
11 蒸気船がつなぐ未来



新しい田んぼを作ろう

ひじら  
日白池をうめ立てたト  
ぼくらまござぶろう  
蔵孫三郎



今のト蔵新田

ト蔵孫三郎について

- 1696年 竹崎村（仁多郡奥出雲町）に生まれる。
- 1721年 荒島村（安来市荒島地区）にうつり住む。
- 1723年 日白池（安来市荒島地区）のうめ立てを始める。（27才）
- 1725年 門生村（安来市島田地区）に畑を切り開く。
- 1728年 羽入（松江市東出雲町）に新しい田を切り開き始める。  
馬潟（松江市馬潟町）の港を作り直す。
- 1729年 十神山（安来市安来町）に木を植える。
- 1730年 羽入の田ができる。
- 1733年 下意東村（松江市東出雲町）の坂下道を作り直す。
- 1739年 日白池のうめ立てが完成する。（43才）  
別石（安来市赤江地区）に新しい田を切り開く。
- 1743年 牛や馬の市場を開く。
- 1744年 挖屋明神（松江市東出雲町）の森下道を作る。
- 1745年 挖屋（松江市東出雲町）のみこ谷に新しい道を作る。
- 1755年 荒島村でなくなる。（59才）

（かっこ内の地名は、今の地名）

やす ぎ  
安来市



今から三百年ほど前、荒島村（今の安来市荒島地区）には、日白池という大きな池がありました。山にはさまれて平地が少ないうえ、日白池があるために田んぼが足りず、荒島村の村人たちちは、まずしい生活を送っていました。

ト 藏孫三郎は、竹崎村（今の奥出雲町竹崎）にある、砂鉄をとる家に生まれました。仕事で、荒島村にたびたび来ていた孫三郎は、

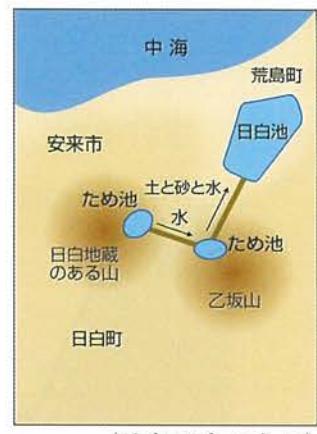
「日白池をうめ立てて田んぼにすることができるたらなあ。米がたくさんとれて、村人のくらしがもっと楽になるだろうに。」

と、池をじつとながめてはつぶやくのでした。しかし、うめ立てなどしたこともない村人たちにとつて、それはゆめのような話でした。

そんなある日、孫三郎は、ある考えを思いつきました。

（砂鉄をとる方法で、池をうめ立てることができるかもしれない。）

砂鉄は、山をくずして土や砂を水といつしょに流してとります。同じようにして日白池をうめ立てようというのです。さつく孫三郎は住まいを荒島村にうつし、新田開発の計画を立てました。そして、松江の殿様に、日白池うめ立ての願いを出し、工事を始めました。



(地名は今のもの)

日白池をうめ立てるには、池の目の前にある乙坂山の土と砂を使うのがいちばんです。その土と砂を日白池に流すための水は、乙坂山の向かいの、日白地蔵のある山のため池の水を使うことにしました。

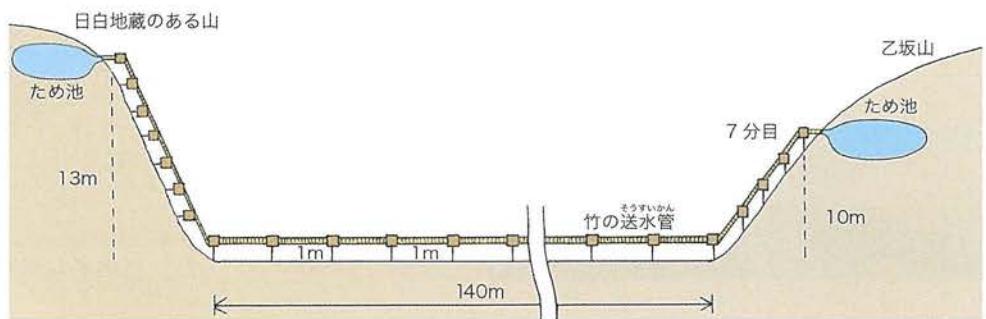
ところが、大きな問題もんだいが孫三郎にふりかかってきました。

日白地蔵のある山にためた水を乙坂山で使うには、水を一度山から下ろして、ふたたび乙坂山に上げなくてはなりません。しかし、それまでの方法では、思っていたように水が上がらないのです。

「あと少しおに……。日白池のうめ立ては、あきらめるしかないのか。」

孫三郎は、くちびるをかんで目をとじました。頭の中には、いねがゆたかに実みのり、金色にかがやく田んぼの風景ふうけいが広がりました。

(いや、ここであきらめるわけにはいかない。新しい田んぼを作ると、心に決めたのだ。何かよい方法ほうほうがあるにちがいない。)



孫三郎は、工事に使つた竹をじつと見つめながら考えました。

（竹づつの中に水を通したらどうだろう。水がもれないようにならなければ、山の上から下りてきた水のいきおいが弱くならないで、乙坂山に水が上がるのではないだろうか。）

さつそく、竹をたてにわって節をとりのぞき、もどどおりに合わせました。それだけではつぎ目から水がもれるので、竹づつ全体になわをまきつけました。同じようにして作つた竹づつをつなげて水を流すと、竹づつの先からいきおいよく水が流れ出てきました。

「よし、これを使えば、山へ水を上げることができる。さあ、竹づつをたくさん作つて、日白地蔵のある山から乙坂山につなぐのだ。」

孫三郎は、みんなで作つた五百本もの竹づつを使つて、百四十メートルの長いつつを十二組作りました。そして、日白地蔵のある山と乙坂山の間をわたして、二つの山のため池をつなぎました。



「それっ、水を流すぞ！」

日白地蔵のある山から長い竹のつつを通ってきた水は、百四十メートル流れてもいきおいを弱めることなく、山の中ほどまで上りました。村人たちはいっせいに喜びの声をあげました。

「やつたぞ。水が上がってきた。」

「よし、これならもうだいじょうぶだ。あとは乙坂山から日白池までの水路を作つて、土と砂を流せばいい。日白池は田んぼに生まれ変わるぞ！」

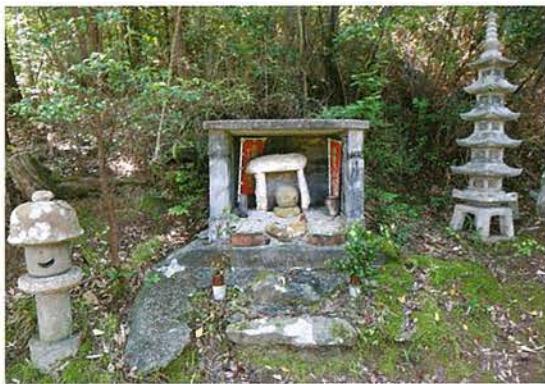
流れる水が日の光にきらきらと反しやして、孫三郎のひとみにうつりました。

その後、孫三郎は十六年もの間、努力に努力をかさねて、ついに日白池のうめ立てを完成させました。

できた田んぼは「ト蔵新田」とよばれ、今も秋になると荒島



ひじらじぞう  
日白地蔵のある山 (左) と、おとさか  
まごさぶろう  
孫三郎は、この140メートルもの間に水を通しました。



日白地蔵

山のふとの木かげに、今もひっそりとまつ  
られています。



ぼくら  
ト藏孫三郎顕彰碑

ト藏新田の北側に、孫三郎をたたえる記念碑  
が建てられています。



ト藏孫三郎の説明

ト藏孫三郎顕彰碑の横にあります。



2

## 意宇川のこいのぼり およ おき

### 意宇川のこいのぼりについて

平成3（1991）年 第1回「みんなであげようこいのぼり」が行われる。

平成23（2011）年 東日本大震災のため、「みんなであげようこいのぼり」を中止する。

平成24（2012）年 最後の「みんなであげようこいのぼり」が開かれる。（第21回）

平成26（2014）年 八雲ゆうじん会が、意宇川のこいのぼり復活をめざして取り組みを始める。

※こいのぼりを上げる期間は、4月の第2日曜日から5月の第2日曜日までの1か月間。毎年、4月の第2日曜日に「みんなであげようこいのぼり」オープニングセレモニーが行われた。

まつえ  
松江市





「わあ、すごい！」

「いっぱい泳いでいるよ。」

松江市八雲町を流れる意宇川の上を、春の風を受けて、ゆうゆうと泳ぐたくさんのかいのぼり。川の土手には、子どもたちの喜ぶ声がひびきわたります。

意宇川でこいのぼりが上げられるようになつたのは、平成三（一九九一）年のことでした。町を元気にしたい、子どもたちが元気に育つてほしいと願う地元の人たちは、考えました。

（使わなくなつたこいのぼりを集め、空いっぱいに泳がせたらどうだろう。そうすれば、こいのぼりのように元気な子どもたちが育つんじゃないかな。）

そこで、「意宇川にこいのぼりを上げる実行委員会」をつくり、荒木さんを世話役として八人のメンバーで取り組み始めました。

最初の年は、五十匹のこいのぼりを上げることができました。その後、毎年、数がふえ、いちばん多いときは、二百五十匹ものこいのぼりが上げられました。たくさんのかいのぼりが空いっぱいに泳ぐすがたはなんとも美しく、多くの人が意宇川をおどずれるようになりました。

こいのぼりを上げる日には、たくさんのかいのぼりを上げる日には、たくさんの子どもたちが集まり、元気いっぱいにはしゃぐ声が聞こえました。荒木さんたちもうれしくなりました。

意宇川の空いっぱいにこいのぼりを上げるためには、大変なこともあります。

まず、一匹でも多くのこいのぼりを集めなければなりません。荒木さんたちは、毎年、手作りのちらしを配つて、こいのぼりの寄付をよびかけました。また、じゅんびとして、集まつたこいのぼりのひもをじょうぶなものにつけかえたり、こいのぼりがすぐ近くで見られるように、川土手の草かりをしたりしました。

こいのぼりが上がってからも苦労がありました。川の上をふく強い風で、こいのぼりがからまつたり、やぶけて落ちたりしてし

週に一度、こいのぼりを下ろして修理する





さきょう じゅうろうどう  
ワイヤーをはる作業は重労働

まうのです。そのたびに、こいのぼりを下ろして修理しなければなりません。また、こいのぼりをつるすひもは、切れることがないよう、ワイヤーという鉄のひもを使います。ひじょうに重いワイヤーを下ろしたり上げたりするのは、何時間もかかる大がかりな作業でした。それを、こいのぼりを上げている一ヶ月の間に、四回も五回もするのです。「意宇川にこいのぼりを上げる実行委員会」のメンバーたちは、仕事を終えたあとや休みの日に集まつて、こうした作業を続けました。

意宇川にこいのぼりが上げられるようになつて二十年以上がすぎ、荒木さんたちも年をとつて、体力がいるこれらの作業を続けることがむずかしくなりました。さらに、「こいのぼりをやがえる柱<sup>はしら</sup>が古くなつてきて、たおれたら大きな事故になつてしまふかもしねい。」などという声もあがるようになりました。荒木さんたちは何度も話し合いをし、平成二十四（二〇一二）年を最後に、意宇川のこいのぼりをやめることにしたのでした。

「こいのぼりが上がらなくなつて、残念だ。もう一度、あのこいのぼりが見たい。」

「どうにかまた、こいのぼりを上げることはできないのか。」

という声があちこちで聞かれました。

そこで、地元の青年たちが立ち上がりました。

「意宇川のこいのぼりを復活させよう！」

この青年たちは、子どものころに意宇川のこいのぼりを見て育つたのでした。

「子どものころ、とても楽しみだつた意宇川のこいのぼり。これから子どもたちにも見せてあげたい。」

「あのこいのぼりに元気をもらつてきた。また、こいのぼりを上げて、町や人をもっと元気にしたい。」

青年たちは「八雲ゆう人会」を作り、活動を始めました。荒木さんたちがこいのぼりにこめた思いは、たしかに子どもたちに伝わっていたのです。



意宇川のこいのぼり復活をめざす地元の青年「八雲ゆう人会」のメンバー



「みんなであげようこいのぼり」のオープニングセレモニーでは、地元の中学校のすいそうがくぶく樂部がえんそうをしました。



オープニングセレモニーで、地元の保育園の子どもたちによる出しものも見られました。



地元の小学生が作った手作りのこいのぼりも上げられました。



こいのぼり同士がからまるのことをふせぐために、3メートルの竹のぼうに、こいのぼりを2ひきずつする工夫をしました。



こいのぼりを上げる期間が終わると、こいのぼりのよごれを落とし、次の年まで大切に保管しました。



「八雲ゆう人会」の取り組みは、新聞にも取りあげられました。みんなの期待の高さがうかがえます。



和菓子職の試験で和菓子を作る土江さん



土江さんが作った和菓子

いずも  
出雲市



## 一万まいの花びら

しまね  
島根がほこる和菓子職人  
つちえとおる  
土江徹さんのちよう戦

### 土江徹さんについて

- 昭和51（1976）年  
ひかわぐんひかわ  
簸川郡斐川町（今の出雲市）に生まれる。
- 平成8（1996）年  
ぎふけん おんかし こうばい  
岐阜県「御菓司 香梅」に修業に行く。
- 平成16（2004）年  
テレビ  
「T V チャンピオン 和菓子職人選手権」（テレビ東京放送）に登場する。
- 平成20（2008）年  
「選・和菓子職 優秀和菓子職」としてみとめられる。
- 平成22（2010）年  
ぜんこく けんきょうだんたいれんごうかい ぶ  
全国菓子研究団体連合会青年部コンテストにおいて準グランプリを受賞する。
- 平成23（2011）年  
フランスで行われた和菓子講習会に、指導者としてまねかれる。
- 平成25（2013）年  
はくらんかい こうげい  
全国菓子博覧会（工芸菓子）において最高賞「名譽総裁賞」を受賞する。
- 平成26（2014）年  
まつえ タイワン タイベイ しちょう  
松江市から台湾・台北市長におくる工芸菓子を制作する。



つちえ  
土江さんの作品

出雲市斐川町に「福泉堂」という和菓子のお店があります。お店のとびらを開けると、美しい花に目がとまります。まるで本物に見えるこれらの花は、すべてお菓子の材料でできています。島根県がほこる和菓子職人、土江徹さんが作ったのです。

徹さんは、その福泉堂に生まれました。朝、徹さんが目を覚ますと、いつもあまいかおりがしてきます。お父さんがあんこをているのです。徹さんは、おさないころから、心をこめて和菓子を作るお父さんのすがたを見て育ちました。

徹さんは、高校生になつたころから和菓子職人をめざすようになりました。お父さんの手伝いをするうちに、細かい作業、ていねいな仕事が求められる和菓子の世界に興味をもつようになつたのです。

高校を卒業した徹さんは、岐阜県の和菓子屋さんで働くこ



とになりました。五年間の修業の始まりです。

朝はだれよりも早く起き、むし器を温め、お湯をわかします。朝ご飯がすむと、仕事が始まります。ししょうや先ぱいが作った和菓子を、町じゅうのお店にどどけてまわるのです。土江くん、何やってるんだ。てきぱきとやってくれないとこまるよ。」

「はい、今すぐやります！」

ぼんやりしているひまなどありません。

（つかれたなあ。早くねたいなあ。）

（もうやめたい。出雲に帰りたい。）

そう思うこともありました。でも、どんなにつかれていても、徹さんは真夜中に練習をするのでした。それだけでは足りず、休みの日にも仕事場へ足を運びました。そんな努力のかいがあつて、三年目でやつとあんこ作りをまかされるようになりました。

修業も終わりに近づいたころ、デパートで和菓子作りの実じつ



「この和菓子、おいしいですね。」  
演をする仕事がありました。

「和菓子つて、そうやって作るんですか。食べるのがもつた  
いないなあ。」

お客様に、徹さんは思いました。

（たくさんの人人が感動する和菓子を作りたい。）  
これが、徹さんの和菓子作りの目標となりました。

五年間の修業を終えた徹さんは、出雲の福泉堂にもどつて  
お父さんからもぎじゅつを学び、和菓子職人としての力をつ  
けていきました。やがて、その力がみとめられ、わかくして  
和菓子職人の日本一を決めるテレビ番組に出場することにな  
りました。徹さんは、力をためすチャンスだと、いつしょ  
けんめいに練習し、本番では自分がなつとくできる作品がで  
きあがりました。ところが、結果はなんと四人中最下位。  
(自分の力はまだまだ足りなかつたんだ。)

それからの徹さんは、よりいっそう和菓子作りにはげみました。

（自分のもつているものをすべて作品につめこみたい。）

徹さんは、平成二十五（二〇一三）年四月に開かれる「全国菓子大博覧会」をめざしました。この博覧会は、お菓子のオリンピックともいわれ、百年以上の歴史があります。徹さんは毎日の仕事を終えると、博覧会に出す作品づくりに情熱をもやし、ますます努力を重ねました。

そうして、さくらの花がさきほこる作品ができあがりました。一万まいのさくらの花びらは、作るのにたくさんの時間がかかりました。作品は多くの人びとの目をひきつけて楽しませ、最高の賞である「名誉総裁賞」を受賞しました。

福泉堂の仕事場では、今日も和菓子作りにはげむ徹さんのすがたがあります。自分へのちようせんはまだ続いているのです。

名誉総裁賞を受賞した作品





### こうげい が し 工芸菓子

美しい日本の花や鳥、四季それぞれの景色を、  
お菓子の材料だけを使って作り上げる和菓子  
を工芸菓子とい。お菓子作りの知識と高い  
ぎじゅつが必要である。



和菓子職認定試験で作った5種類の和菓子  
和菓子には、生菓子やようかんなど、季節に  
合わせたいいろいろな種類がある。作り方もさ  
まざまで、種類のちがう5つの和菓子を作  
るのは大変だった。



フランスで和菓子をしょうかいする徹さん(右)  
フランスのナント市で行われた和菓子のイベ  
ントにまねかれ、うで前をひろうした。



### めい よ そうさいしょ 名誉総裁賞の「たて」

「全国菓子大博覧会 ひろしま菓子博2013」  
で、名誉総裁賞を受賞したときの「たて」。



### お菓子でできたお寿司

徹さんは、お菓子の材料を使って、いろいろ  
なものを本物そっくりに作ることができる。

お手本はいらない  
青木実三郎先生の絵の指導



青木実三郎先生



児童がかいた絵

青木実三郎先生について

- 明治18（1885）年 仁多郡馬木村（今の奥出雲町）に生まれる。
- 明治41（1908）年 島根県師範学校を卒業し、馬木村尋常高等小学校で絵を教えるようになる。
- 大正4（1915）年 馬木小学校校長になる。全校児童に絵を教える。
- 昭和2（1927）年 チェコスロバキア国際美術教育会議で馬木の児童がかいた絵がしようとされる。
- 昭和43（1968）年 83才でなくなる。

おくいすも  
奥出雲町



「季節によつて、うつり変わる馬木の景色は、実に美しい。」

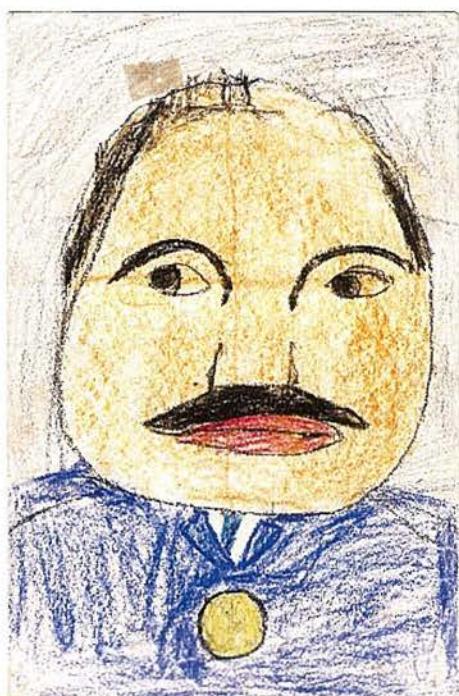
これは、今から百年ほど前に、仁多郡馬木村（今の奥出雲町）で小学校の先生をしていた青木実三郎の言葉です。実三郎は、美しい馬木の自然に囲まれたくらしが大好きでした。

実三郎は三十六年間小学校の先生をしていた中で、特に図画を教えることに力を入れていました。実三郎が先生になつたばかりのころ、子どもに絵を教えるときは、花や動物をかいだお手本をそのままかき写すことが大切だとされていました。

（美しい自然が目の前に広がつていて、そこにくらしているたくさんの人たちがいるのに……。）

（子どもたちは、それをかく力があるのに……。）

子どもたちがお手本のまねをして絵をかく間、子どもたちにまかせきりにする先生がいることや、まつたく同じ絵ができることがあることが、わかい実三郎には（それでも絵を教えていることになるのか。）と、がまんできませんでした。



当時の子どもがかいた青木実三郎先生

実三郎の絵の教え方は、それまでの教え方とはまったくちがっていました。

「お手本をはなれて、自分の好きな絵をかくこともよいことです。自分の考へで思  
い切つてかくのです。」

お手本を使わずに、絵をかく人が自分でかきたいことを見つけて、思つたとおり  
に表現するように教えたのです。実三郎は子どもたちが絵の題材を選ぶことを大切  
にし、身近な山や四季のうつり変わり、祭りや農作業といった馬木の自然や文化、  
人びとの暮らしを深く見つめさせ、感じたままをすなおにかかせました。

このやり方に反対する先生たちもいましたが、実三郎は、

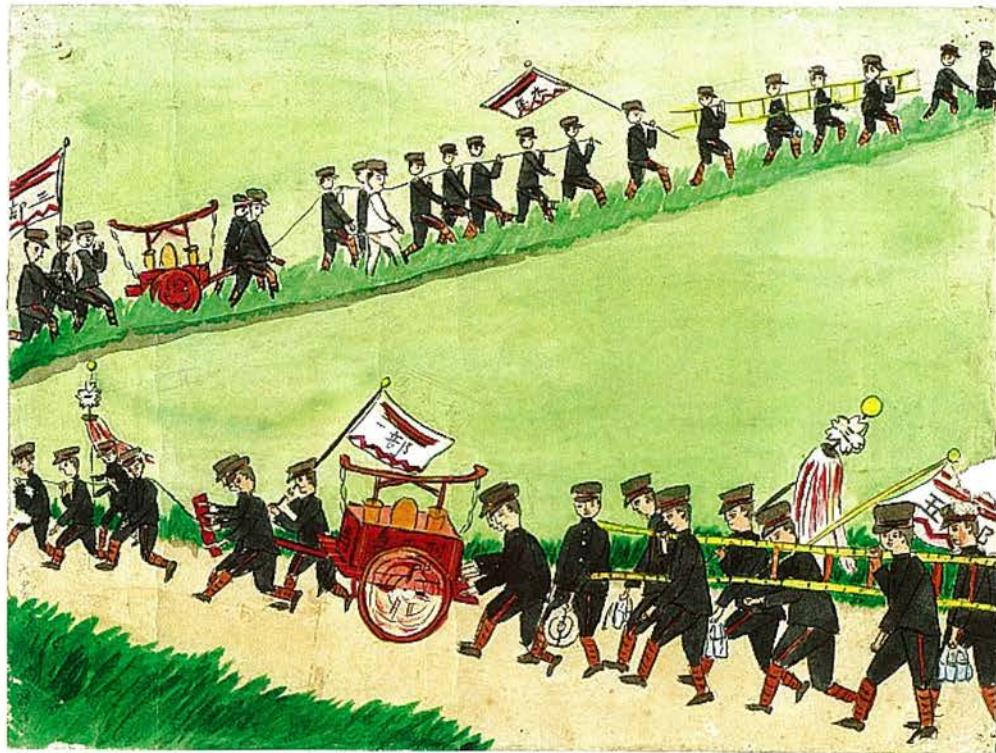
（子どもたちが本来もつてゐる絵をかく力を引き出したい。）

（お手本をまねさせるだけでは、絵をかく力を育てることにはならない。）

という自分の考へを変えることはありませんでした。

実三郎の新しい教え方で、子どもたちは自分が感じるまま自由に絵をかく楽しさ  
を知つたのでした。実際に花や景色をじっくり見て、感じたことを思い出しながら  
絵をかく回数が、だんだんふえていきました。

やがて実三郎は、自分の教え方は正しい、と強く自信をもつようになりました。  
そしてある日、子どもたちの前ではつきりと言つたのです。



「お手本をはなれて、自分の好きな絵をかくことはよいことです。いろいろな題材を見つけて、かきたいものをたくさんもちましょう。そして、その中から、かいでもうまいと思つたものを選び、どんどんかきましょう。」

子どもたちが目をかがやかせながら絵をかくすがたを見て、実三郎は、子どもたちとともに、絵をかく喜びを感じたのでした。

その後、東京で行われた「全国学生図画展覽会」で、馬木小学校の子どもがかいした絵が大変ひょうばんになりました。上の絵もその一つで、今でも馬木小学校の校長室にかざられています。当時、馬木にあつた五つの消防隊がわざを競う大会の様子をかいたものです。この絵をかいた高橋さんは言います。

「先生は、わたしが『あつ、そうか。』と、すなおに思える言葉をかけてくださいました。絵にかく人物と同じ動きを自分も実際にしながら考え、一つ一つ

ていねいに、見たまま、感じたままにかきました。先生のおかげで、『よし、最後まであきらめずに、ていねいにかきあげるぞ。』と、どんどんやる気がわいてきたのを覚えています。』

そして、実三郎が教えた馬木の子どもたちの作品が、ヨーロッパやアメリカにわたり、外国人にも見てもらえるようになりました。

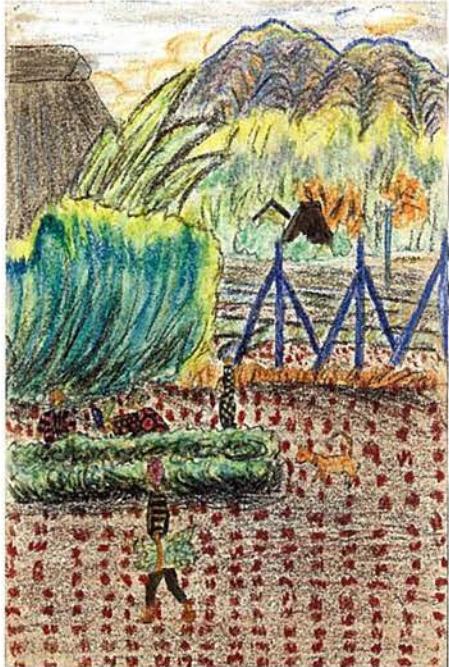
昭和四十三（一九六八）年、実三郎は八十三才で周りの人たちにおしまれながら、生まれ育った馬木の地でこの世を去りました。

「なくなられた今でも、教えてもらつたわたしたちみんなの中に、先生の教えは生きています。』

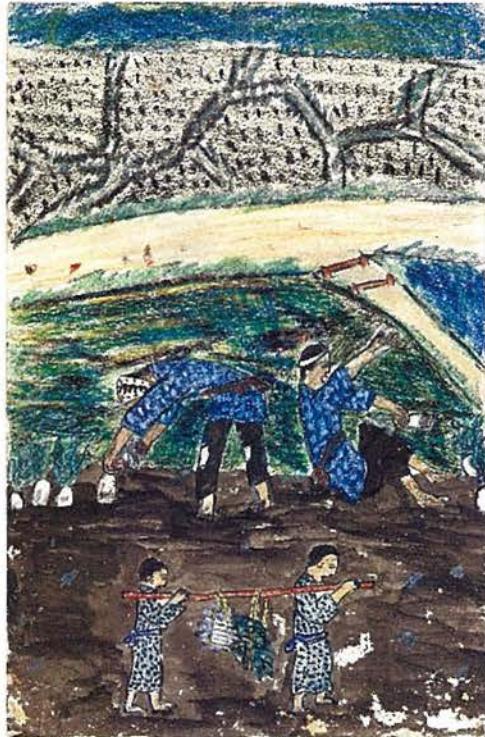
高橋さんだけでなく、地いきの人たちが、実三郎が教えた子どもたちの作品をほぞんしたり、くらしの絵の展示会を開いたりして、これから生まれてくる人たちにも、実三郎の教えを伝えようとしています。



あおき じつさぶろう  
青木実三郎が教えた子どもたちの作品



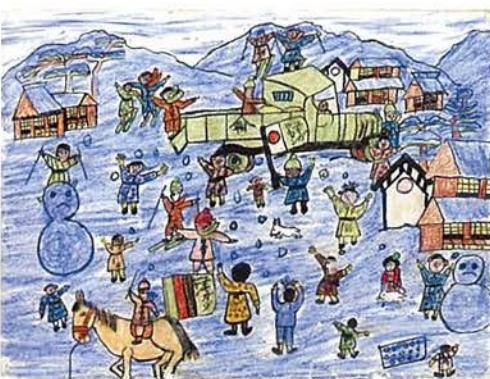
「秋の収穫作業」 6年生



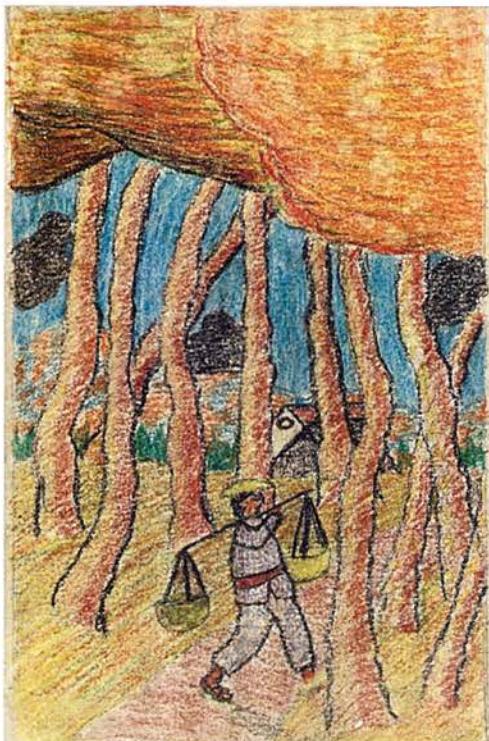
「大根」 6年生



「秋の収穫作業」



「ユキガッセン」 4年生



「たけ」 6年生

5

# たつた一人のお医者さん

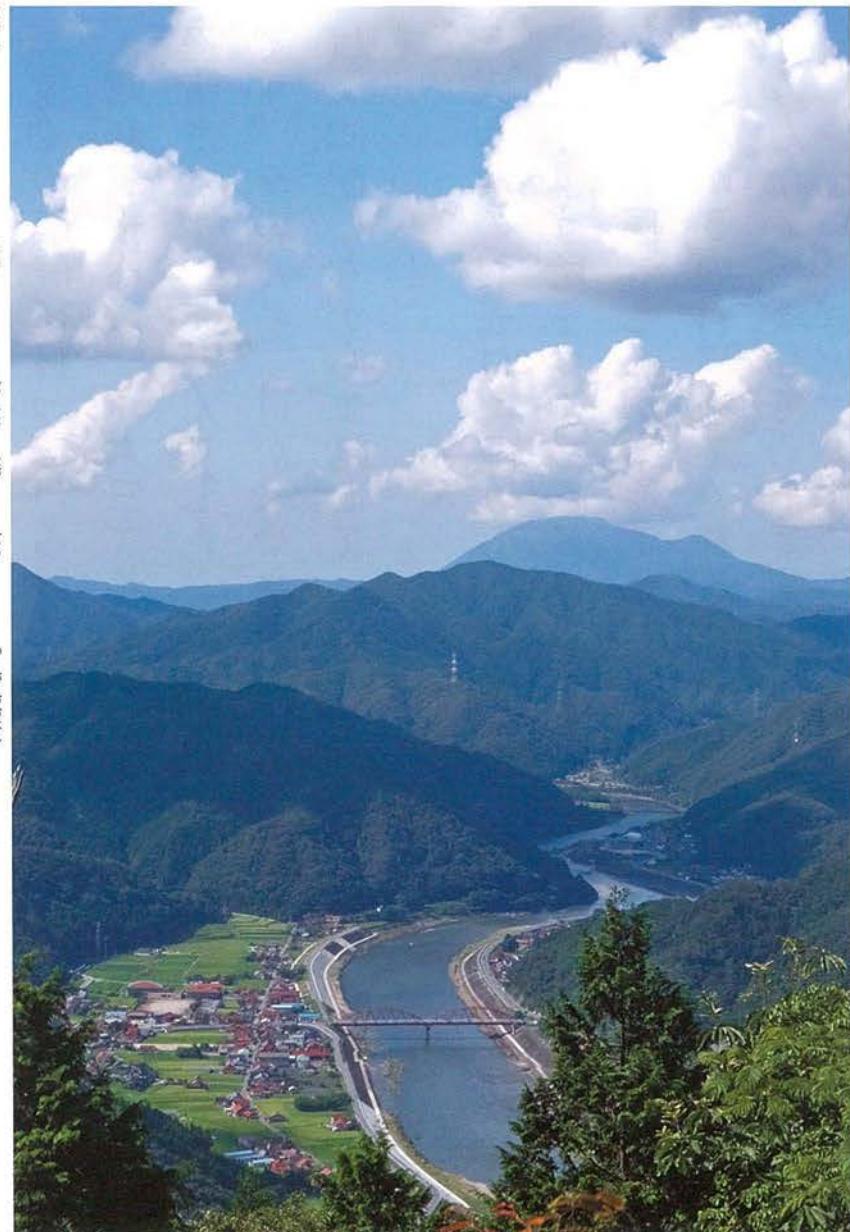
遠藤武さん

えんどうたけし

さん

の

決意



大和村のしんりょう所があつた場所を流れる江の川（都賀大橋が見える）



みさと  
美郷町



## 遠藤武さんについて

- 大正9（1920）年 邑智郡大和村（今の美郷町）に生まれる。  
昭和25（1950）年 慶應義塾大学を卒業する。  
昭和32（1957）年 千葉県立血清研究所で働く。  
昭和41（1966）年 大和村国民健康保険診療所初代所長になる。  
平成4（1994）年 大和村名誉村民になる。  
平成24（2012）年 92才でなくなる。

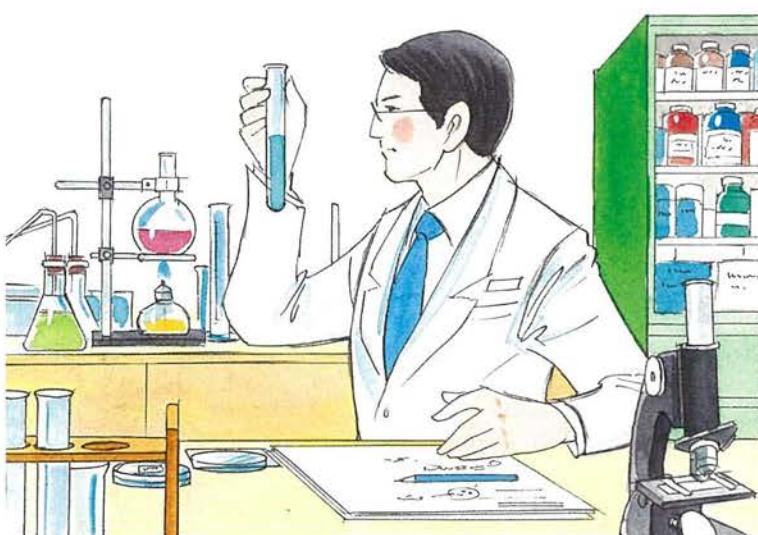
「村にお医者さんいたらなあ。」

「遠くの病院に行っている間に、けがも病気も悪くなつてしまふ。」

昭和三十八（一九六三）年からの四年間、邑智郡大和村（今の美郷町）には、お医者さんがいませんでした。それまでいたお医者さんが病気でたおれてしまつたのです。そのため、けが人や急病人は遠くの町まで行かなくてはならず、村の人たちは、心配しながら生活していました。

大和村の村長は、こうした不安をなくすために、村にしんりょう所をつくることにしました。しかし、そのためにはお医者さんが必要です。

「だれかこの村に来てくれるお医者さんはいなか。みんなで相談して、千葉県で病気の研究をしている大和村出身の遠藤武さんにお願いすることになりました。早速、村長が遠藤さんの家へ行つて、話をしました。『遠藤先生しかいません。どうか村にもどつて、こまつている村の人を助けてください。』



この話を聞いた遠藤さんは、ふるさとである大和村の人たちのことが心配でたまらなくなりました。

次の日、遠藤さんが働いている研究所の所長にこの話をする

と、

「今している研究はどうなるんだ。それに、村でたった一人の医者になるなんて大変だぞ。」

と、何度も引きとめられました。

遠藤さんはなやみました。このまま研究を続けるか、大和村に医者としてもどるか……。

（研究はだれかに続けてもらえばよい。）

（わたしを必要とする人がいるんだ。）

遠藤さんはついに大和村に帰る決意をして、研究所の仕事をやめました。

大和村に帰った遠藤さんに、ふるさとをなつかしむ時間はありませんでした。午前中はしんりょう所で、午後は車でかん者じや



さんの家に行つてしん察です。夜中でも、急病人さゆうびよが出ると、すぐ<sup>の</sup>に車に乗つて出かけました。地いきの学校へ校医こういとして行くことも、けがの手術しゅじゅつをすることもありました。

遠藤さんは、村の人たちのためにせいいっぱい働きました。

村で火事が起<sup>お</sup>こつた夜、いつ来るかわからないけが人のために、しんりょう所の電気をつけて待<sup>ま</sup>つっていたこともあります。

「先生、ありがとうございます。」

「先生、またよろしくお願ねがいします。」

気がつけば、村の人たちにとつて、遠藤さんはなくてはならない人になつていきました。そんな遠藤さんの家には、季節の野菜や果物、大和村の中心を流れる江の川でつれたアユなど、村の人たちからのおくりものがたえませんでした。

江の川は大和村の中心を流れる大きな川です。

昭和四十七(一九七二)

年に大雨がふり、江の川周辺しゅうへんの町や





昭和四十七年の水害でひ害を受けた、都賀大橋（上）  
と村（下）の様子

村は大きなひ害を受けました。電話はつながらず、道路や橋は流されてしまいました。遠藤さんは、「通ることができない道路がたくさんあるなら、建設とちゅうでまだ汽車の走らない線路やトンネルを使えばいい。」

と、車に乗つて、線路やトンネルを何度も行き来ては、村じゅうのけが人や病人を治りようしました。

「大和村に遠藤先生が来てくれてよかつた。」

運動会で村の人といつしょに楽しんでいた先生。神楽と自然が大好きだった先生。

村の人たちはみんな、先生が大好きでした。

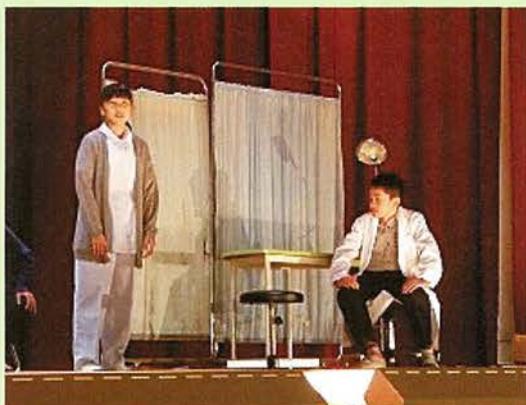
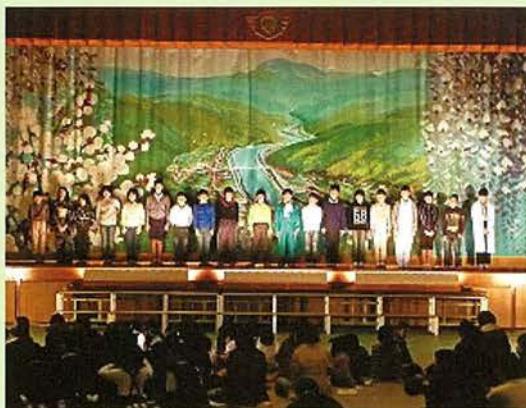
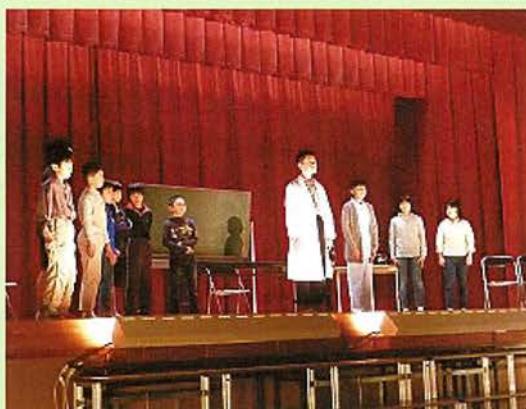
平成二十四（二〇一二）年十二月、多くの人からしたわれた遠藤さんは、九十二才の生がいを終えました。



めい よ そんみん こう えんどう  
名譽村民のしょう号をおくられたときの遠藤  
たけし 武さん (当時72才)



むかし つ が おおはし  
昔の都賀大橋



へいせい だいわ えんどう  
平成25年、遠藤さんの話を知った地元の大和小学校の5、6年生は、遠藤さんといっしょ  
に働いていた方にお話を聞きました。そして、学習発表会で、そのお話をもとにしたげきを  
発表しました。

6

石見神楽面作りの喜び  
いわみかぐらめん  
柿田勝郎さん  
かきたかつろう  
さんの思い



柿田勝郎さんについて

- 昭和17（1942）年 ブサン 釜山（韓国）に生まれる。
- 昭和20（1945）年 日本に引き上げ、浜田市長浜町で育つ。
- 昭和35（1960）年 浜田高等学校普通科を卒業する。  
筆記具を販売する会社で働き始める。
- 昭和45（1970）年ごろ しゅ味で神楽面を作り始める。
- 昭和47（1972）年 会社をやめて、神楽面の工ぼうを開く。

はまだ  
浜田市





ながはましやちゅう はちまん はんにゃ  
長浜社中「八幡」般若面

これは、石見神樂を舞うときに使うお面です。何でで  
きていると思いますか。答えは、紙です。紙だと、やぶ  
れたりこわれたりしそうですね。でも、このお面は、今  
から四十年以上も前に浜田で作られて、何度も神樂で使  
われましたが、どこもこわれていません。

どんちき どんちき どんちき  
どんちき どんちき どんちき  
どんどこ どこちき  
どこちき どんどん

さののうさくぶつ  
佐野社中「塵輪」赤鬼



秋になると、石見地方から広島県にかけて、町のいろいろな  
神社から、神楽のにぎやかな音が聞こえきます。お面やごう  
かな衣しようを身につけた舞い手が、鬼ぼうや弓矢などを手に  
して、おはやしに合わせて舞います。古くから伝わる物語をも  
とにした神楽は、農作物がとれた喜びと、自然への感謝の気持

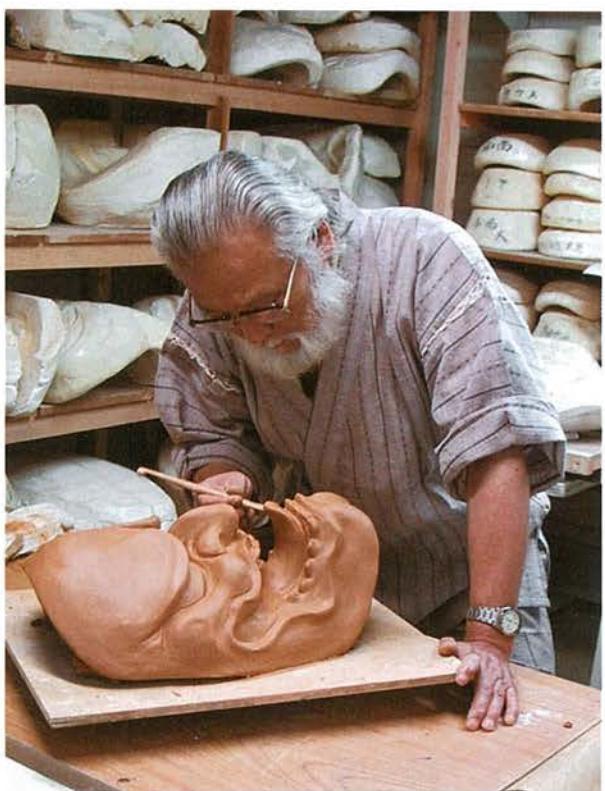


佐野社中「有明」<sup>ありあけ</sup>化け猫<sup>ばねこ</sup>

ちを表すためのものでした。  
神楽の音が聞こえると、あちらこちらで、子どもたちが舞いをまねて。ボーズを決めます。石見神楽は、小さな子どもからお年寄りまで、多くの人びとに愛され続けているのです。

石見地方には神楽を舞う団体<sup>かぐらだんたい</sup>が百五十以上<sup>いじょう</sup>あり、神楽が大切に守<sup>まも</sup>られ、受けつ<sup>うけつ</sup>がれてきました。そこで使われるお面は、もともと木でできていきました。やがて、動きの速い舞い<sup>はや</sup>が広まつたことで、紙でできた軽い<sup>かる</sup>お面が求められるようになりました。お面を作る面師<sup>めんし</sup>は、浜田になくてはならない人なのです。

石見神楽面の面師<sup>ひどり</sup>の一人に柿田勝郎<sup>かきたかつろう</sup>さんがいます。ここにしようかいしてあるお面はすべて柿田さんが作ったものです。柿田さんのところには、県内だけでなく、広島県や山口県、四国、九州<sup>きゅうしゅう</sup>からも注文<sup>ちゅうもん</sup>がきます。柿田さんのお面作りは、神楽の舞い手との話し合いから始<sup>はじ</sup>



ねん土で型を作る柿田さん

まります。

どんな神楽で使うのですか。

どの場面で使いたいのですか。

どんな気持ちを表したいですか。

どんな衣しょうやかぶり物と合わせるのですか。

目の位置、まゆのかたむき、口の大きさなど、少しちがうだけでもお面の表情が変わります。細かいところまでしつかり話し合うことで、舞い手がほしいと思つてお面のイメージや、その団体が昔から大切に受けついできた伝統が見えてきます。それをもとに、柿田さんは、約一ヶ月かけて、少しづつちがいのあるお面を二まいから三まい作ります。

注文を受け始めたばかりのわかいころは、「ちがうなあ。もつとこうしてもらえんかのう。」と言われ、作り直すことが何度もありました。

(どうしたら舞い手がほしいと思っているお面が作れるだろう。)

柿田さんの頭の中はいつも、お面のことでいっぱいです。できあがったお面を手

にした舞い手が、「こりやあ、ええ。イメージどおりだ。ありがとうございます。」と言つてくれることが、柿田さんの喜びです。こうして生み出された石見神楽面は、十年先、二十年先、ていねいに修理をすれば、百年先であつても使うことができるのです。浜田に神楽面の仕事場を開いて四十数年、数えきれないほどの舞い手と話し、何百まいものお面を生みだしてきた柿田さんは言います。

「石見神楽は、舞いも衣しようも、面も、時代とともに少しづつ形を変えてきました。これからも少しづつ変化しながら、そのときどきの人々に愛され、次の時代へと受けつがれていくでしょう。わたしが作つたお面が、この伝統の中にあることは、大きな喜びです。」

石見神楽をえんじる団体の数は、ここ数年、ふえてきています。石見神楽面の作り方を勉強したいと、柿田さんの仕事場をたずねる人も後をたちません。

柿田さんは今日も仕事場で、十年先、二十年先、百年先も愛される石見神楽面づくりにはげんでいます。

西村社中「鍾馗」



いわみかぐらめん  
石見神楽面（長浜面）の作り方

①ねん土で型を作る



②和紙をはる



③型をわる



④つらに柿しぶをぬる



⑤目鼻のあなを開ける



⑥ご粉をぬる



⑦色をつける



⑧毛を植える



⑨仕上げをする



よみがえれ、お茶畑  
 お茶農家 吉田茂さんの決意



津和野町のお茶作りについて

江戸時代	津和野藩よりお茶の生産がすすめられる。
明治21（1888）年	鹿足郡茶業組合が成立。
昭和10（1935）年	製茶機械が導入される。
昭和41（1966）年	吉田茂さんの祖父が青野山茶園を開き、お茶作りを始める。
平成13（2001）年	蒸す工程から製品にするまでの製茶機械を協同で買い入れ、茶畑を広げる。
平成25（2013）年	ごう雨で茶畑がひ害にあう。

津和野町



平成二十五（二〇一三）年七月二十八日、津和野町で暗いうちにふり出した雨は、明け方になると、いっそうはげしくなりました。消防団の一員として地図の見回りをしていた吉田茂さんは、川の水がものすごいきおいでふえていく様子をまのあたりにして、心配になりました。

（茶畠は、だいじょうぶだろうか……。）

吉田さんの家は、青野山のふもとの津和野町直地地区にあります。吉田さんはそこで、お茶作りをしています。津和野町では、古くからおいしいお茶が作られており、今でも、茶畠のあざやかな緑をところどころで見ることができます。

雨がやむと、吉田さんは大急ぎで茶畠に向きました。お茶の木が流れなかつたことにはっとしながら茶畠に足を一步ふみ入れると、

「ああっ！」

吉田さんの足は、ズボッとひざまでどろの中にはまりこんでしまいました。よく見ると、茶畠は近くのあふれた川から運ばれただろばかり。なんと、畠のとなりにある小屋の中までどろが流れこんでいるではありませんか。



小屋にしまっていた農具をやっとの思いで家の近くまで運び出した吉田さんは、そのままその場にすわりこんでしまいました。

そのとき、吉田さんの子ども二人が家の中から出てきました。二人は、すわりこんでいる吉田さんとどろまみれの農具を見ると、すぐに家にもどりました。ふたたび家から出てきた二人の手には、軍手がはめられていました。そして何も言わず、農具についたどろを落とし始めたのです。その様子を見た吉田さんも、ゆっくり立ち上がって、いつしょにどろを落とし始めました。

(根ねがやられていなければ、芽めを出すはず。)

吉田さんは、いのるような気持ちで、畑の茶葉ちゃばについたどろやごみを一つずつていねいに落としましたが、たまつたどろが根をだめにしていました。

「そりやあ、植えかえるか、あきらめるかしかないでね……。」

そんな声が聞こえた気がしました。一度どろをかぶった土では、新しいお茶の木を植えても、うまく育つかどうか、わかりません。



たとえ順調に育つたとしても、お茶の葉がとれるようになるには、六年から七年もかかります。

吉田さんは、ねむれない日びをすごしました。

「母さん、わしゃあ、どうすればええんかのう。」

吉田さんは、なやみになやんで、長年いっしょにお茶作りをしてきたお母さんに相談しました。

「あんたが思うようにやつてみりやあええわあね。あんたがおじいちゃんから受けついだ茶畠なんじやけえね。」

お母さんは、もう育つはずのないお茶の木をやさしくなでながら、ぽつりと言いました。そのとき、吉田さんは心を決めました。  
(そうだ。ここで負けていられるものか。)

植えかえを決意した吉田さんを待っていたのは、流れこんだどろや水につかつた畠の土を取りのぞく作業でした。そのどろを取とりのぞかないと、新しいお茶の木は植えられません。



ショベルカーでどろを取りのぞく人、スコップでどろをかき出す人。たくさんの人人が手伝つてくれました。もちろん、吉田さん自身もスコップをふるい続けました。

（もうすぐだ。もうすぐで……。）

吉田さんの手は、まめができてはつぶれをくり返しました。でも、そのいたみは苦になりませんでした。

とうとう、平成二十六（二〇一四）年三月、植えかえの日をむかえました。周りには雪が残り、身を切るような寒さです。新しい木を植える吉田さんの手はすぐにかじかみましたが、作業のスピードが落ちることはありません。吉田さんの体からは、湯気がもうもうと上がりました。どちら、ふと顔を上げると、土色一色だった畠に緑の点線がうかび上がっていました。

植えかえ作業は無事に終わりました。新しく植えたお茶の木から、次つぎと新芽が出てきています。今はまだ、小さな小さな芽ですが、時がたてば、青野山のふもとを美しく色どってくれることでしょう。



①茶畠から見る青野山



②直地地区の茶畠



③冬に「しも」がおりないように、茶畠に立てられているファン



④植えかえたお茶の木から出た新芽



⑤大雨さい害後の津和野町



⑥出荷作業が行われる工場

お茶さいばいの1年の流れ	
2月	肥料をまく。 木のじょうたいをチェック。
3月	えだを切りそろえる。
4月	新芽が出る。
5月～6月	一番茶のしゅうかく・加工・出荷
7月～8月	二番茶のしゅうかく・加工・出荷
9月～1月	堆肥をまく。 虫や病気の予防をする。 木の健康管理をする。

### お茶出荷までの流れ（加工）

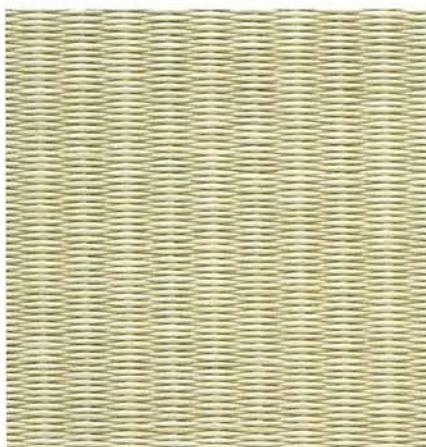
- (1) しゅうかくしたお茶を蒸す。
- (2) 送風機で冷やす。
- (3) もみながらかわかす。  
(水分がなくなるまで。)
- (4) 茶葉を折りたたむ。
- (5) 冷ぞう庫でほぞんする。(12度～14度)
- (6) 出荷前に煎ってふくろにつめる。

# 三かぶのいぐさ

たたみ表の父  
國東治兵衛



益田市遠田町にある、国東治兵衛の碑



いぐさで作られた、たたみの表面



たたみが使われている部屋



## 国東治兵衛について

寛保3（1743）年

とおだ 遠田村（益田市遠田町）の紙問屋（紙をあつかう店）に生まれる。

天明2（1782）年

はじ 天明の大ききんが始まり、村のくらしがきびしくなる。

天明3（1783）年～

ぶんご おおいたけん びんご ひろしま 豊後（大分県）の国東地方や備後（広島県）からいぐさのなえを  
も 持ち帰る。

寛政10（1798）年

かみすきちようほうき 『紙漉重宝記』の本を出し、和紙の作り方を伝える。なくなった時  
期は不明。

大正13（1924）年

治兵衛の碑が建てられる。 (かっこ内の地名は、今の地名)

今から二百五十年ほど前、遠田村（今の益田市遠田町）に、国東治兵衛という人がいました。そのころの遠田村では、大雨や日照りなどの悪天候で農作物がじゅうぶんにとれず、多くの人が、食べるものが足りずにこまつていきました。「村を、村人の暮らしを助ける方法はないだろうか。」治兵衛はいつも考えていたのでした。

ある日、治兵衛は、自分の先祖が生まれた豊後の国（今の大分県）の国東で、「たたみ表」を作っていることを思い出しました。「たたみ表」は、たたみの表に付ける「ござ」のこと、「いぐさ」という草のくきを織つて作ります。

（そうだ、遠田村で、みんなでたたみ表を作つて売るのはどうだろう。）  
いぐさを育ててたたみ表を作る作業には、村の人のだれもが何かしら協力できる仕事がありそうです。うまくいけば、安定したしゅう入を得ることができるのではないかと考えたのでした。

治兵衛は、さつそく遠い国東に出向いて、いぐさのなえを分けてもらいました。（遠田村でも、いぐさはうまく育つじやろうか。）

治兵衛の心配をよそに、いぐさは遠田の田んぼですくすくと育ちました。青あお



と育つたいぐさを見て、治兵衛はなみだを流しました。  
(村がいぐさでいっぱいになつたら、すてきだらうなあ。)  
目をとじると、いぐさの緑色みどりにあふれる遠田の景色けしきが、治兵衛の前に広がりました。

治兵衛は、村の人にはぐさを育てることをすすめ、いっしょに育てました。いぐさは、はく息いきが白くなる十二月の寒さむさの中でなえを植うえ、真夏まなつの暑いきさの中では草をかり取とつてほさなくてはなりません。うまく育たないこともあつて、きびしい仕事しごとでした。村の人たちは、みんなで力を合わせていぐさ作りにはげみました。やがて、遠田のいぐさで作ったたみ表は有名ゆうめいになりました。やがて、「遠田表とおだおもて」とよばれました。

しばらくして、備後びんごの国(今の広島県ひろしま)に、「備後表びんごおもて」という、ひょうばんのよいたたみ表があることを聞いた治兵衛は、どうしてもたしかめたり、すぐに備後の国へと旅立ちました。



色が美しく、しなやかで、じょうぶな備後表は、遠田表とはちがう種類のいぐさからできていました。さらに、このいぐさはとても育てやすいと、備後の人そだが教えてくれました。

（これはすばらしい。遠田にこのいぐさを持って帰ろう。）

治兵衛は決心しました。そこで、農家のうかをたずねて、いぐさのなえを分けてくれるようにたのみました。

ところが、どの家もなえを分けてくれません。

「それはできん。こここのいぐさは、この国だけで作っているものじゃ。よそには絶対ぜったいに出したくないんじゃ。」

それでも治兵衛はあきらめず、足がぼうになりながらも、村じゅうを歩き続けました。

「お願ねがいします。ほんの一かぶでいいのです。」

そんな治兵衛のすがたを見た一人の村人が治兵衛に声をかけ、わけを聞きました。治兵衛は、遠田村のことや自分の願いを一生けん命めいめいに伝えました。すると、その村人は言いました。

「わかりました。いぐさを分けてあげましょう。」



「本当ですか。ありがとうございます。ありがとうございます。」

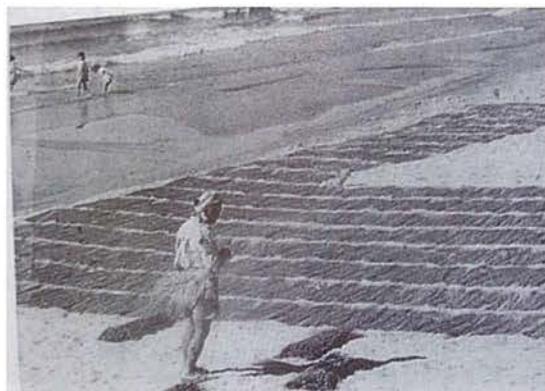
治兵衛は村人から、三かぶのなえを大切に受け取りました。  
そして、何度もお礼を言うと、急いで遠田に帰りました。  
(さあ、がんばるぞ!)

治兵衛は、持ち帰ったなえを植えて育てました。言われたと  
おり、とても育てやすく、村のみんなもたいへん喜びました。  
いぐさ作りはやがて、となりの村にも広まりました。遠田村の  
あたり一帯は、治兵衛がゆめ見た緑の里になつたのです。

治兵衛は、いぐさを織つてたたみ表を作る、ござ機も広めま  
した。そのころの遠田村では、秋になると、たくさん農家か  
ら、トトトンタンタンと、たたみ表を織る音が聞こえてきました。  
村の女性たちがござ機で織つたたみ表は、やがて「石州  
表」とよばれてひょうばんになり、遠田村の暮らしをゆたかに  
しました。



①いぐさが育っている様子



②いぐさをかわかす様子

昭和36年ごろ。(『益田市誌(下)』より)



③ござ機

(益田市立歴史民俗資料館蔵)



④ひね車

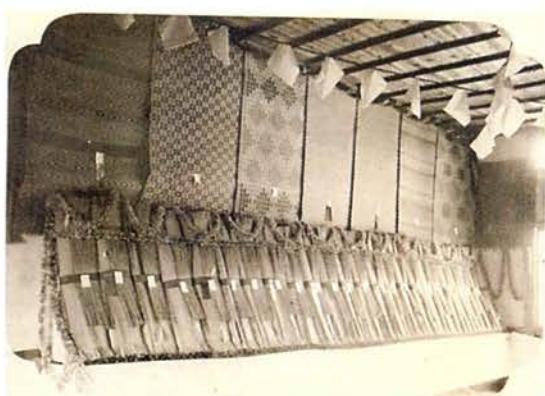
たたみ表を織るときに使う糸を作る道具。

(益田市立歴史民俗資料館蔵)



⑤ござ機でござを織る様子

昭和30年ごろ。(『益田市誌(下)卷』より)



⑥美濃郡重要物産品評会(大正4年)

たたみ表がならんでいる様子。美濃郡は今  
の益田市。(益田市立歴史民俗資料館蔵)

9

名賀にひびけ、  
SLが走る町  
津和野町

汽笛



雪の中、けむりをはきながら走るSL。手前に写真をとるファンが見える。



美しい景色の中を走るSLやまぐち号



SLやまぐち号について

昭和54（1979）年8月1日

運行開始

平成17（2005）年8月

名賀地区で山火事発生

平成22（2010）年3月

SL応えん団結成

平成25（2013）年7月28日

やまぐちしまねごううさいがい  
山口・島根豪雨災害

平成26（2014）年8月23日

運行再開

津和野町





美しいコスモスの花とSL。

SL  
エスエル

SLやまぐち号が走る津和野町は、かついいSLの写真がとれる町として有名です。名賀地区の美しい景色の中を走るSL、白井トンネル付近の急な坂を、けむりをはきながら力強く上つてくるSL。津和野町名賀地区には、そんなSLの写真をとるために、全国から数多くのファンが集まります。

(たくさんの人にもうえる。)

名賀地区の住民はSLファンをここによくむかえ、いい写真がとれるようにと、線路近くの草をかつたりコスモスや菜の花を植えたりしていました。

ところが、SLファンの中から、もつといい場所でさつえいしたいと、人の土地に勝手に車で入ったり、山林の木を切ったりする人が出てきました。

（こまつた。このままでは、名賀がめちゃくちゃにされてしまう。）

（どうしたらいいのだろう。）

住民たちはなやむようになりました。

そうした中、平成十七（二〇〇五）年八月に、名

賀地区で山林火災が発生しました。

（SLファンによるたばこの火の不始末が原因ではないか。）

住民の間に、SLファンをうたがう気持ちがうまれました。

住民とSLファンとの対立たいりつをさけるために、両者りょうしゃで話し合いをすることになりました。結局けつきょく、火災の原因はわかりませんでしたが、SLファンの中から「住民にめいわくをかけてはいけない。」という声が上がりました。そこでSLファンが、みんなで出し合ったお金で「車の乗り入れを禁きんず」、「立ち入りを禁

SLの写真をとろうと集まつた、たくさんの人たち。



「SL」などのかんばんを立てたり、草かりや花を植える活動を住民といつしょにしたりするようになりました。

そうした様子を見た住民たちに、けんかしていくもしょうがないという気持ちが出てきました。そしてついに、SL応えん団ができました。名賀地区のために、SLの運行とSLファンを応えんするのです。

（名賀に来ててくれてうれしい、と最初に思ったときの気持ちにもどろう。）

応えん団として、何ができるかを相談しました。

そして、応えん団は、今までしていた花の世話や草かりに加え、年三回SL茶屋のお店を出すこと、地いきのイベントへの出店などをするようになります。SL弁当やうどんなどを売るSL茶屋は、SLを見ようと集まつた家族連れなどでにぎわいます。SL応えん団員と仲良くなつて、毎回顔を出すSL



SL茶屋



かんばん

ファンもいます。

（前よりたくさん的人が名賀に来てくれて いる。）

（名賀を好きになつてくれた人がいる。）

活動は、どんどん活発になつていきました。

しかし、平成二十五（二〇一三年）年七月二十

八日、今度はごう雨災害が名賀地区をおそいました。家は土砂で流され、道路はえぐりとられ、線路もどぎれてしましました。もちろんSLやまぐち号は運行できなくなりました。

災害のニュースが流れるど、全国のSLファンから多くの温かいメッセージやきふ金がよせられました。それらは名賀の人びとを大いに元気づけました。

平成二十六（二〇一四）年八月、SLやまぐち号運転再開です。待ちに待つた再開を、名賀の人びともSLファンもともに喜びました。



ごう雨でくずれ落ちた線路



### SLやまぐち号

昭和54（1979）年8月1日、山口線に「SLやまぐち号」として蒸気機関車が復活した。「新山口」から「津和野」までの62.9kmを約2時間かけて走る。



### 平成25年7月28日のごう雨災害

ものすごくはげしい雨で、津和野町名賀地区では川がはんらんしたり土砂くずれが発生したりした。それにより、家が流されるなど、大きなひ害が出た。



### SL応えん団

村田隆義さんを団長に、24名で活動をしている。草かりや駅のそうじなどいろいろな活動をして、SLファンをもてなしている。やまぐち号の運転再開をいわうイベントは、たくさんの人でにぎわった。



### SLやまぐち号 運転再開

SLやまぐち号は平成26（2014）年8月23日に新山口駅から津和野駅まで運転が再開された。ごう雨災害から約13か月がたっていた。写真は、復旧工事が行われている名賀地区を津和野駅へ向かって走るSLやまぐち号。

# 日本のファラデー

科学者になつた永海佐一郎さん



とうきょうこうとうこうぎょう じっけん  
東京高等工業学校実験室にて



永海佐一郎さん

## 永海佐一郎さんについて

- 明治22（1889）年 隠岐郡西郷町中町（今の隠岐の島町）に生まれる。
- 明治35（1902）年 西郷小学校を卒業し、松江中学校に入学する。
- 明治37（1904）年 学校に通うお金がなくなり、松江中学校を退学する。
- 明治38（1905）年 東京高等工業学校で見習いになる。
- 明治39（1906）年 東京高等工業学校で助手になる。
- 明治41（1908）年 学校の先生になる試験に合格する。
- 明治43（1910）年 新潟県の長岡商業学校の先生になる。
- 大正2（1913）年 東北帝国大学に入学する。
- 大正6（1917）年 東北帝国大学を卒業する。東京帝国大学大学院に入学する。
- 大正8（1919）年 東北帝国大学の先生になる。
- 昭和19（1944）年 東京工業大学養成所化学分析科長となる。
- 昭和24（1949）年 定年で大学をやめる。
- 昭和25（1950）年 西郷町に帰り、研究を続ける。
- 昭和49（1974）年 西郷町の名誉町民第一号となる。
- 昭和53（1978）年 89才でなくなる。

### 隠岐の島町





永海佐一郎は、明治二十二（一八八九）年、今の隠岐の島町に生まれた科学者です。

佐一郎が四才のころ、お父さんが海の事故でなくなりました。それからは、お母さん一人で、佐一郎と妹を育ててくれました。佐一郎は勉強が好きでした。生活が苦しいことはわかつっていましたが、一生けん命に勉強をして、しようらいは学問に関する仕事につきたいと思つてきました。

（もつと勉強したい。勉強をして英語の先生になりたい。）

体があまりじょうぶではなく、お金もない佐一郎でしたが、どのようにすれば、自分の好きな学問の道へ進めるのだろうと、毎日毎日、自分のしようらいについて考えました。やがて佐一郎は、東京では、新聞や牛にゅう配達などをしながら、夜は学校に通つて勉強できる方法があることを知りました。その話を佐一郎から聞いたお母さんは、佐一郎の学問への強い思いを知り、知り合いである大学の先生に、東京で仕事を

させてもらえないかと、お願ねがいをしてくれたのでした。

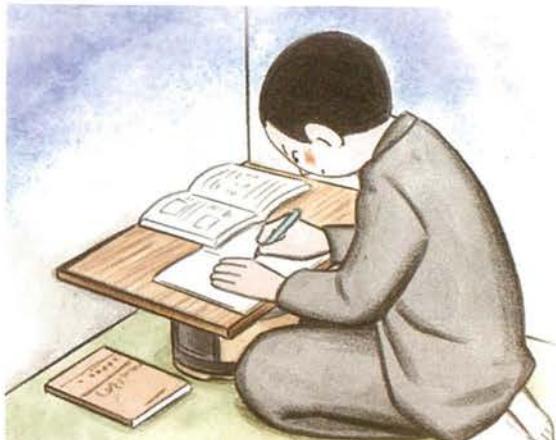


しばらくすると、東京の学校で働く仕事が見つかり、夜は英語学校で勉強をすることができるという話が佐一郎のところにとどきました。十六才の佐一郎は、飛び上がらんばかりに喜んで、すぐに東京へ向むかいました。東京高等工業学校（今の東京工業大学）で働くことになったのです。

佐一郎の仕事は、研究室や実験室のそうちと、実験のじゅんびやかたづけでした。朝、六時三十分には学校に行き、夕方五時まで仕事をしました。仕事から帰ると、夕食をさつとすませて英語学校に通いました。給料は少なく、時間に追われる生活で、少しのお金ができると、ずっと入っていないおふろに入るか、魚を食べようか、まようような日びをすごしました。でも、勉強できることが何よりも大きな喜びでした。

佐一郎は、夜十二時前になることはありませんでした。

（今にきっと学校の先生になるぞ。）という希望きぼうを強くもち、





きびしい生活の中で、勉強にはげむ日が一年半続きました。

そんな佐一郎の様子を見ている人がいました。東京高等工業学校で化学を教える加藤与五郎先生でした。加藤先生は、佐一郎に、助手として研究を手伝つてもらうことにしたのです。

助手として働く最初の日、加藤先生は佐一郎に、「永海くん、君はファラデーを知つているか。」とたずねました。

「知りません。」

と、佐一郎は答えました。ファラデーは、イギリスで電気などの研究をした、世界でもっともすぐれた科学者の一人です。

加藤先生は話を続けました。

「ファラデーは、学校へ行くお金がなくて、町の工場で働いていたのだよ。ロンドン大学のデイビー先生は、仕事の合間を見つけていつも勉強しているファラデーにたいへん感

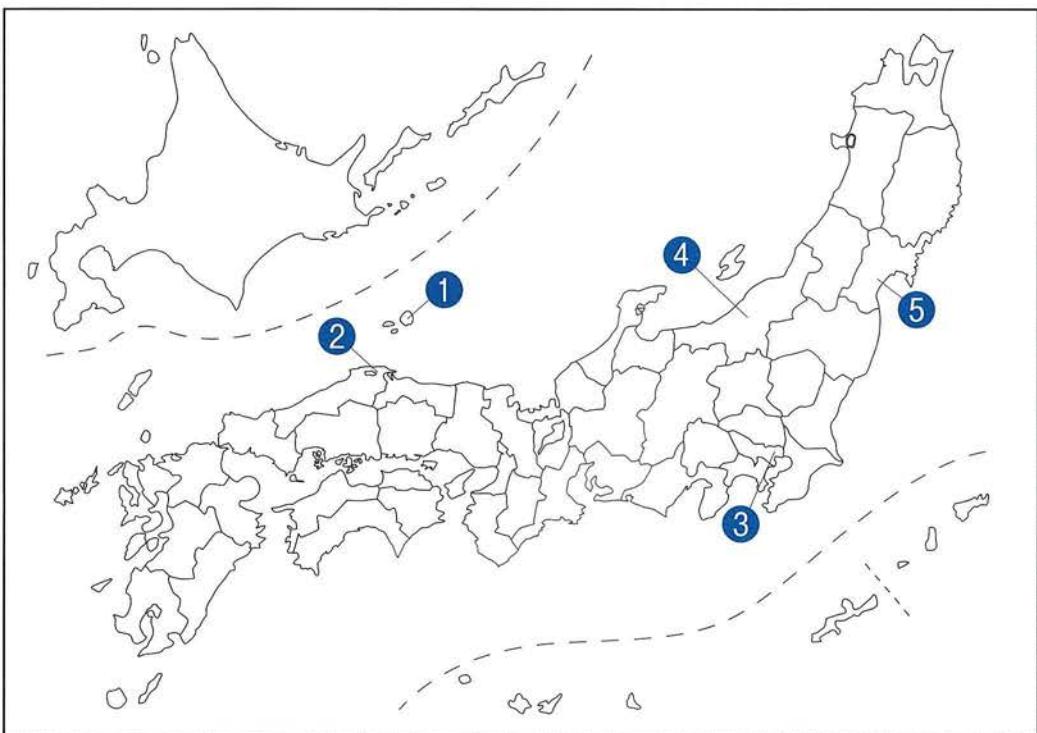


心し、助手に採用したんだ。それをきっかけにして、ファラデーはすぐれた科学者になった。永海くん、君はしょうらい、ファラデーになれ。ぼくもディビーになるから。」この言葉は、佐一郎が一生、わされることのできない大切な言葉となりました。

（よし、日本のファラデーと言われるような、りっぱな科学者になろう。絶対になつてみせるぞ。）

佐一郎は、心に決め、英語の先生ではなく、加藤先生が研究していた化学の先生になることに目標を変えました。

その後、熱心に学び続けた佐一郎は大学の先生になり、六十一才まで研究や教育にはげみました。大学をやめてからは、お母さんの待つ隠岐の島町に帰り、自分の家に実験室を作つて研究を続けました。



①佐一郎が生まれ育った西郷町（今の隠岐の島町）

②中学校で2年間をすごした松江

③見習いや助手をした東京高等工業学校のある東京

④先生としてつとめた新潟県長岡市

⑤大学生として学び、助教授としてつとめた宮城県仙台市

佐一郎が加藤与五郎先生から教わり、実せんし、西郷町の学校などで話した内容

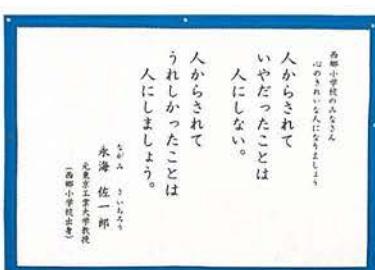
○人としていちばん大切なことは、心のきれいなことである。

○心をきれいにする実行方法

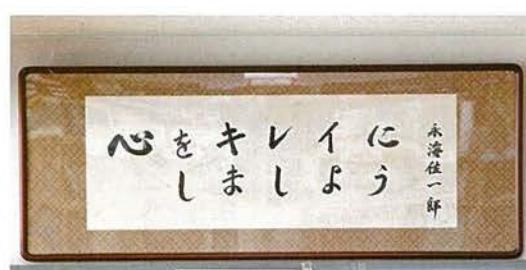
- 一. 人からされてうれしかったことを、人にせよ。
- 二. 人からされていやなことを、人にするな。
- 三. 人から受けた恩は、つつしんでわすれるな。
- 四. 人にほどこした恩は、思うな。

○人のかち=天職に熱心な度×心のきれいな度

人のかちは、教育、社会上の地位、しゅう入、財産、家がら、職業の種類等に関係ない。



西郷小学校のろう下にはられて  
いる、佐一郎の教え



西郷小学校図書館にある、佐一郎の書

まつうらさかる  
じょうきせん  
蒸氣船がつなぐ未来



西ノ島町別府港にある、松浦斌の銅像



松浦斌と隠岐航路について

- 嘉永4（1851）年 焼火神社神主の長男として生まれる。
- 慶応2（1866）年 焼火神社の神主となる。
- 明治16（1883）年 隠岐島議会で、蒸氣船を買って隠岐と本土をつなぐことをつい案するが、大反対される。
- 明治17（1884）年 隠岐島議会で二度目のつい案をし、蒸氣船を買うことが決まる。
- 明治18（1885）年 「隠岐丸」の運航が始まる。
- 明治23（1890）年 隠岐航路の経営がうまくいかない中、体をこわして38才でなくなる。
- 明治27（1894）年 松浦斌の志をつぐ若者たちが、隠岐汽船株式会社を始める。
- 明治28（1895）年 隠岐汽船が「第二隠岐丸」も買い、二せきの船が隠岐と本土を行き来するようになる。

今から百三十年ほど前、隠岐から本土へ行くには、風の強さや向きにたよる小さなほかけ船しかありませんでした。本土まで十日以上もかかり、天気が悪いときにはひと月以上船を出すことができませんでした。台風や冬の冷たい北風で、ほかけ船があら波の中にちんばつして、多くの命いのちが失われました。また、島には十分な食べ物ものがなかつたため、本土へ行き来ができるないと、島の人はとてもこまりました。

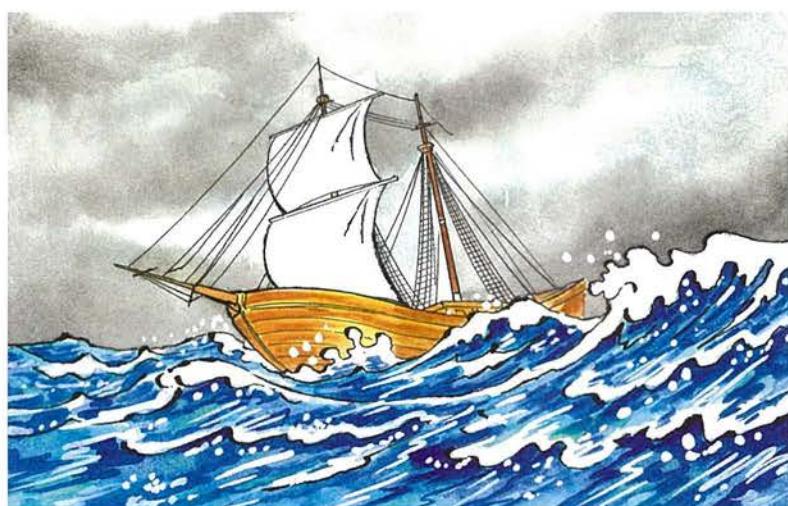
焼火神社の神主かんぬしをしていた三十一才の松浦斌まつうらさかるは、その

様子ようすに、いつも心をいためていました。

(蒸氣船じょうきせんがあれば、安全あんぜんに、そして定期的に行き来できるようになる。)

はげしいふぶきと高波にほんかいの日本海にほんかいを見ながら、斌はは、蒸氣船をどうにかして買うことができないかと考えました。

明治十六めいじじゅうろく（一八八三）年、隠岐のくらしを決める大切な話し合いで、斌はは、蒸氣船が隠岐の人びとに必要ひつようであることをうつたえました。





「みなさん、どうか真けんに考えてください。島のみんなで力を合わせれば、蒸気船を手に入れることができるはずです。」

ところが、たくさんのお金が必要となる斌の意見に賛成する人は、だれもいませんでした。島の漁師からは、

「蒸気船の大きな音で島の魚がにげたら、漁師は生活ができないくなる。」

と、せめられました。

「これまでに、たくさんの命が日本海のあら波に飲みこまれていきました。残された家族の悲しみや苦しみを、みなさんは知っているはずです。それに、本土との行き来がしやすくなれば、隠岐のくらしがもつとゆたかになるのです。」

何度も何度も説明しましたが、斌は人びとの考え方を変えることはできませんでした。

島のためを思っているにもかかわらず、斌は、蒸気船に反対する人たちから、石を投げつけられたり竹やりでおそれれたりして、身のきけんを感じながら、すごさなくてはなりませんで



した。

やがて、斌は自分の部屋<sup>へや</sup>にとじこもりがちになりました。

そんな斌を、たびたびたずねる人がいました。隱岐島群長<sup>おきとうぐんちよう</sup>の  
高島士駿<sup>たかしまたけと</sup>です。

「隱岐には蒸気船<sup>じょうきせん</sup>が絶対<sup>ぜつたい</sup>に必要なのだと、島の人たちに話し続<sup>つづ</sup>けよう。あきらめなければ、いつか、わかつてもらえる日が来るはずだ。」

心強いおうえんを得た斌は、町や村をかけめぐり、蒸気船<sup>じょうきせん</sup>が安全<sup>あんぜん</sup>であることや、島の發<sup>はつ</sup>てんにつながること、魚がにげる心<sup>しん</sup>配<sup>ばい</sup>はないことなどを、くり返<sup>かえ</sup>していねいに説明<sup>せつめい</sup>しつづけました。次の話し合<sup>つき</sup>いでは、斌にかわって士駿が蒸気船<sup>じょうきせん</sup>について提案<sup>ていあん</sup>しましたが、また多くの人が反対<sup>はんたい</sup>しました。その様子<sup>ようす</sup>を見て、斌はゆっくり立ち上がって話し出しました。

「このままでは、隱岐の島は、本土から取り残<sup>のこ</sup>されてしまいます。隱岐でくらす人のために、蒸気船を買いましょう。わた



しが、そのために必要なお金の半分を出します。みんなに  
めいわくはかけません。」

力強く語られる斌の言葉に、反対していた人たちは、とうと  
う何も言えなくなりました。

斌は、先祖から代だい受けつぎ、守つてきた山の木を切りた  
おして、蒸気船を買うお金を用意しました。

そして、明治十七（一八八四）年十二月、ついにイギリス製  
のりっぱな蒸気船が島にやってきました。

（ああ、これで島がゆたかになるぞ。）

斌は、大きな喜びとともに隠岐の明るい未来を思うのでした。  
船名は『隠岐丸』。そのマークは、松浦家の家もんにちなん  
で「三ツ星」としました。

今でも焼火神社たくひじんじゃがある焼火山の下を通り、フエリーは必ず汽笛汽笛を鳴らします。汽笛には、海の安全と、隠岐航路開設こうろかいせつに力を注いだ斌たちに対する感謝かんしゃの気持ちがこめられています。



①松浦斌  
まつうらさかの

「決めたことは、すぐに行動にうつす人だった  
そうです。」と、今の焼火神社神主である松浦  
道仁さんは話す。



③焼火神社本殿  
ほんでん

岩場の横に建てられている。フェリーが通る  
ときには、今でも汽笛が聞こえる。



⑤初代蒸気船「隠岐丸」(左)と今のフェリー「しらしま」(右)

隠岐と本土の行き来をするだけでなく、本土からさまざまな物資がとどくなど、蒸気船は、島民  
にとって欠かせないそんざいである。



②焼火神社入り口

焼火山に神社がある。入り口から神社まで、  
歩いて15分ほどかかる。



④ほかけ船

つか  
当時使われていたもの。(出典『隠岐の人びと』)



# 12 少しだけなら



「ねえ、お母さん、パソコンを使つてもいいかな。  
学校の調べものがあるんだ。」  
あつしたちは、総合的な学習<sup>そうごうがくしゅう</sup>の時間で、遠足<sup>おとしょく</sup>のパンフレットづくりをしています。あつしは、中央公園<sup>ちゅうおうこうえん</sup>の担当<sup>たんどう</sup>になりました。

「ダメよ。きちんと使わないと、たいへんなことになるんだから。お母さんは今から買い物に行くから、帰<sup>か</sup>ってきたらいっしょに見てあげるわ。」

「大じょうぶだよ、学校で習<sup>なら</sup>つたから。みんなも、家で使つてているって言つていたよ。」

「本当に、大じょうぶなの。」

「ちゃんとやくそくを守<sup>まも</sup>るから。ぼくをしんじて。ねつ。」



あつしは、パソコンを使うときは『時間を決める』、『あやしいサイトは見ない』、『名前や住所などは入力しない』、ということを、お母さんとやくそくしています。

「大じょうぶね、しつかり守るのよ。」

お母さんは、そう言うと買いものに出かけました。

「いつものように、タイマーをセットして……。」

あつしは、さっそく、パソコンに向かいました。

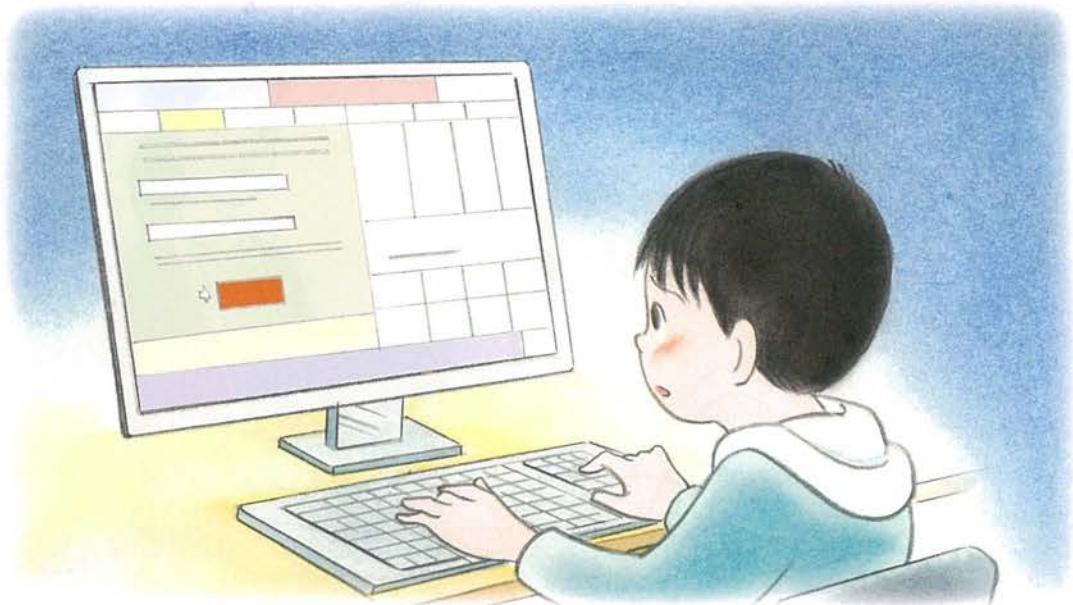
「中央公園」<sup>ちゅうおうこうえん</sup>と入力すると、うまくサイトを見つけることができました。

「よし、これをいんさつしたら、できあがりだ。」

そのときです。画面<sup>がめん</sup>の右はしに、気になるものを

見つけました。

「なになに、ゲームソフトのわりびきけんがもらえるのか。でも、あやしいサイトは見ないって、お母さんとやくそくしたからな……。でも、少しだ



けなら、大じょうぶだろう……。』

あつしは、おそるおそる、クリックしてみました。

『あなたの名前と連絡先れんらくを入力してください。』

『ええっ、名前を入れないとダメなのか……。仕方しかたないな。』

あつしは、パソコンの電源でんげんを切り、中央公園のいんさつぶつを整理せいけいし始めました。

でも、あつしは、ゲームソフトのわりびきけんが気になつて仕方しかたがありません。

『少しだけなら、いいかな。それに、お母さんもまだ帰ってきていないし。』

あつしは、もう一度いちど、パソコンの電源を入れ、先ほどのサイトにすすみました。

『名前と連絡先か……。少しだけなら、大じょうぶだろう。きっと、みんなもしているよ。』

どきどきしながら、名前を入れ始めたときです。



ピピツ、ピピツ、ピピツ。

タイマーの音が、へやの中にひびきわたりました。あつしは、はつとしてキーボードから手をはなしました。

カチツ。タイマーの音を止めたあつしは、じつとパソコンの画面を見つめました。  
(ふう……。)

大きくなめいきをついたあつしは、ゆっくりとゲームソフトのサイトをどじ、パソコンの電源を切りました。そして、中央公園のいんさつぶつを整理しました。

はじめました。

そこに、お母さんかあさんが買いものから帰つてきました。  
「ただいま。あらつ、ちゃんと使つかえたのね。やくそくも守まもつて、えらかったわね。」

「うん……。」

あつしは、下を向いて、ぽつりと答えました。

# 13 レストランで



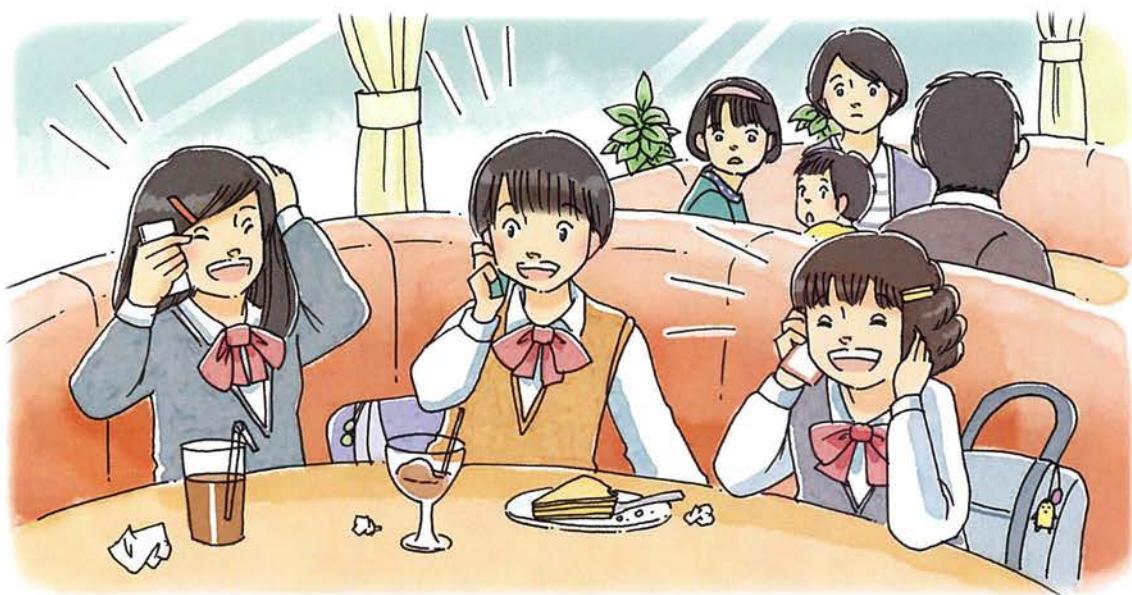
今日はわたしの誕生日です。誕生日を家族でおいわいすることになり、夕方から近くのレストランに出来かけました。その日がちょうど日曜日だったので、わたしたちが着いたときには、レストランはお客様でいっぱいでした。

たまたま入口近くのテーブルがあいて、そこにすわることができました。いつも来ているレストランでしたが、今日はわたしの誕生日ということもあり、いつもとはちがった気分でした。

「さあ、あなたの好きな物をたのみなさい。」

「やつたあ。」

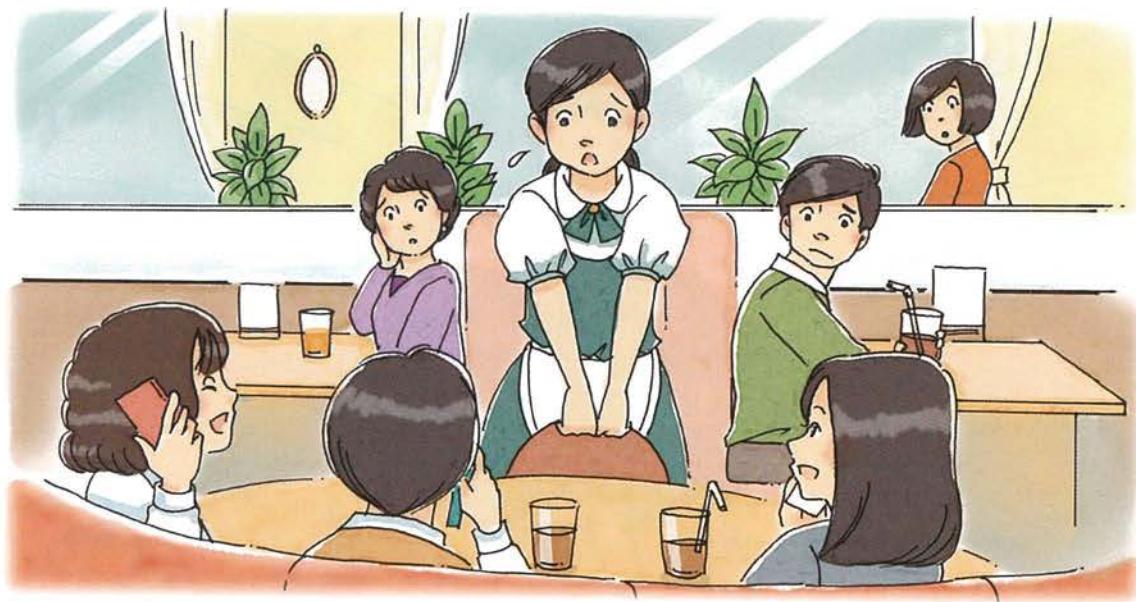
と、おいしそうな物、食べたい物をみんなで注文しました。



注文した物ものが来るまでの間、家族で色々な話をし待つていました。家族のみんなが、心からわたしの誕生日たんじょうびをおいわいしてくれて、いることがつたわつてきて、とてもうれしい気持ちでいっぱいになりました。

しばらくして、わたしは、近くのテーブルにすわっている三人の高校生くらいのお姉ねえさんたちが気になりました。三人ともけいしたい電話でしゃべっています。まわりの人の話し声が聞こえにくくなるくらい大きな声なのです。

レストランにいる人たちには、まわりの人たちのことを考えて、めいわくのかからない声でしづかにしゃべりをしています。そんな中、大きな声で、けいしたい電話でしゃべっている高校生くらいのお姉さんたち。



「今、わたし、レストランにいるの。友達といっしょよ。」

「ねえねえ、この前、たのんでおいたことができた。」「今度またみんなで遊びに行こうね。」

三人とも、それぞれの電話の相手と話しています。

店の人が、

「ほかのお客様きゃくざまのごめいわくになりますから、けい  
たい電話ちゅういはごえんりょください。」  
と注意しても話しつづけています。

店の人のこまつた顔がわたしの心に強くのこりました。まわりの人たちも、三人をちらちら見ながら、  
めいわくそくな顔をしています。

わたしは、思わず、

(ここはレストランです。みんなのことを考えてくれ  
ださい！)

と大声でさけびたりました。きっと、ほかの人



も同じ気持ちだつたと思ひます。

それから、わたしたちのテーブルには、注文した料理がどき、家族で楽しい時間をすごすことができました。わたしにとって、すてきな誕生日になりました。

でも、レストランを出るとき、ふたたびわたしは、けいたい電話で大きな声で話していたお姉さんたちのすがたを思い出しました。

わたしは、

（ここはレストランです。みんなのことを考えてくれださい！）

と、もう一度、大きな声でさけびたくなりました。

## 編集委員

氏名	役職	所属等	
永田 繁雄	教 授	東京学芸大学	監修者
毛利 直巳	校 長	松江市立古江小学校	編集委員長
京谷 雄輔	教 諭	松江市立島根小学校	編集委員
河村 恭子	教 諭	浜田市立今福小学校	編集委員
中村 浩志	教 諭	津和野町立津和野小学校	編集委員
川角 朋之	指導主事	奥出雲町教育委員会	編集委員
山根 久美子	指導主事	隠岐の島町教育委員会	編集委員
遠山 茂樹	指導主事	松江教育事務所	編集委員
竹田 賢治	指導主事	出雲教育事務所	編集委員
堀江 真佐邦	指導主事	浜田教育事務所	編集委員
和田 政幸	指導主事	益田教育事務所	編集委員
宇野 陽子	指導主事	隠岐教育事務所	編集委員
青山 浩晃	指導主事	島根県教育センター	編集委員
矢野 英明	参 事	島根県教育庁	事務局
片寄 泰史	指導主事	島根県教育庁教育指導課心の教育推進グループ	事務局
山本 一穂	社会教育主事	島根県教育庁教育指導課心の教育推進グループ	事務局
須田 秀樹	指導主事	島根県教育庁教育指導課心の教育推進グループ	事務局

## 編集協力者

永島 有香	教 諭	津和野町立津和野小学校
長嶺 歩	非常勤職員	津和野町立津和野小学校
石川 文雄	指 導 員	益田市教育委員会

	内容	写真／絵
	道徳の時間は……	クリエイティブ・ノア (吉田健二、なぎさ謙二、宮崎匠)
	大きな心を育てよう	土江徹
1	新しい田んぼを作ろう	クリエイティブ・ノア (吉田健二)
2	泳げ、空高く	
3	一万まいの花びら	土江徹／クリエイティブ・ノア (坂道なつ)
4	お手本はいらない	
5	たった一人のお医者さん	クリエイティブ・ノア (宮崎匠)
6	石見神楽面作りの喜び	どんちっちサポートいわみ (『八幡』般若面)、 浜田石見神楽社中連絡協議会 (『塵輪』赤鬼)、 浜田石見神楽社中連絡協議会 (『有明』化け猫)、 アイ企画 (作業中の柿田さん)、 浜田石見神楽社中連絡協議会 (『鍾馗』)
7	よみがえれ、お茶畑	クリエイティブ・ノア (イシヤマ アズサ)
8	三かぶのいぐさ	クリエイティブ・ノア (吉田健二)
9	名賀にひびけ、汽笛	SL応援団、ギャラリー・アイヒエル代表 岡本国治、吉永昂弘 山口県観光連盟、益田広域消防本部 津和野分遣所
10	日本のファラデー	クリエイティブ・ノア (なぎさ謙二)
11	蒸気船がつなぐ未来	クリエイティブ・ノア (吉田健二)
12	少しだけなら	クリエイティブ・ノア (なぎさ謙二)
13	レストランで	クリエイティブ・ノア (坂道なつ)

## しまねの道徳 小学校中学年

平成27年3月20日発行

発行所 島根県教育庁教育指導課

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

